世界名作劇場

プリンセス
小公女セーラ

『消えそうないのち』

第 35 話

提供　ハウス食品工業

制作　日本アニメーション
　　　フジテレビ

脚本　中西隆三

登場キャラクター（第35話「消えそうないのち」）

セーラ・クルー
ミンチン院長
アメリア先生
ベッキー
ピーター
アーメンガード
ロッティ
ラビニア
ジェシー
ガートルード

モリー
ジェームス
医師ワイルド
イライザ叔母さん
エミリー（人形）
シーザー（猫）
メルの一家（ネズミ）

1

ミンチン女学院・屋根の上（朝）

灰色の空を——黒雲が走り、風の音。

×　　×　　×

窓枠で、肩寄せ合ってピピと鳴く雀達。

——どこからか重く沈んだ鐘の音。

2

同・ベッキーの部屋

ベッドで身を起すベッキー、そっと壁を叩き、隣りに

声をかける——

ベッキー「お嬢様……お嬢様……」

返事がない——ベッキー、急いでベッドから脱け出る。

3

同・屋根裏部屋

ベッドに、昨夜の服の儘、仰向いて眼を閉じているセーラ ——その片手が額にあてられている。

ノックの音に続いて ——

ベッキーの声「お嬢様……お嬢様……」

動かないセーラ ——

ドアが開き、そっと入って来るベッキー、急いでベッドの傍に寄る。

ふっと眼を開くセーラ ——

ベッキー「あ、お嬢様……」

セーラ「べ、ベッキー……（はっとなる）あ、私……お、起きなくては……」

必死に起きようとするが、起きられない。

急いで手を貸そうとしたベッキー、はっと、セーラの額に手を当てる。

ベッキー「まあ……凄い熱です！　……お嬢様、モリーさんには私

から話しときます。今日はお休みになってて下さいまし」

セーラ「でも……私、今日は、ラビニアの洋服を取りに行かなくては……」

ベッキー「とんでもございません。そんな事ならこの私が致しますから……」

毛布をかけ直してやる——

セーラ「あ、有難う、ベッキー……」

ベッキー「じゃ、今、冷たいタオルを持って参りますから……」

ベッキー、出て行く——ほっと息をついたセーラ、静かに眼を閉じる。

4 同・台所

ベッキーが、タオルをしぼり、水差しとカップを盆にのせている。

入って来るモリーとジェームス——

モリー「おや、お前一人でなにしてるんだよ」

ベッキー「あ、お早うございます　モリーさんにジェームスさん」

ジェームス「フン、朝の仕度もしねえで……セーラはどうしたんだよ！」

ベッキー「はい、それがあの、火がついたみたいに熱があって……」

モリー「なんだって？」

ベッキー「だ、だもんで、今日は……」

ジェームス「休みてえってのか」

ベッキー「お願いです。セーラさんの分は、私が働きますから」

モリー「冗談じゃないよ。勝手にズルを決められてたまるもんか！」

ベッキー「ズルじゃないス、ほんとなんです」

モリー「いいさ、引ずって来てやるから！」

ジェームス「おう、クセにならア」

モリー、つかつかと出て行く——

ベッキー「あ、モリーさん！」
ジェームス「お前は働くんだ！」
ぐいと摑まれて突き飛ばされる――
ベッキー「あぁッ……」
壁にふっ飛んだベッキー、泣顔になる。
ベッキー「お、お嬢様……！」

5 同・屋根裏部屋

ドアが開き、入って来るモリー、両手を腰に、仁王立ちで見おろす――
モリー「セーラ！　……仮病もいい加減におし」
ベッドで――昏々と眠っているセーラ、熱の為に息だけが早い。
モリー「フン……起きるんだよ！」

いきなりセーラの腕を摑んで引立てようとする――瞬間、はっとなって手を離す。
その儘、どっとベッドから落ちるセーラ、眼を閉じた儘動こうとしない。
茫然と見たモリー、そっと手を伸ばすと、セーラの頬に甲をあてる――一瞬、ビクッと手を引く。
身を起し、恐ろしいものでも見たように、二歩、三歩後退ると、飜って部屋を飛び出す――
――開けっ放しのドア。
――床に転げ落ちた儘のセーラ、意識なく苦し気な呼吸を続けている。

6 同・一階廊下

――聞える振鈴の音。

院長室から、ミンチンが出て来る。

その時、慌ただしく降りて来るモリー。

モリー「あ、院長先生……」

ミンチン「騒々しい！　……どうしたのです」

モリー「は、はい、実は……」

荒い息で駆け寄ると、何事か囁く――

その時、階段を降りて来るアメリアと、続いて女生徒たちの姿――

ミンチン、ジロリとモリーを見直す。

ミンチン「なんですって？　……セーラが？」

モリー「は、はい……あの熱から見ると、よほど悪い病気ではないかと……」

はっとなるアーメンガードとロッテイ、ざわめく女生徒たち――

ミンチン「静かに！　……静かになさい！」

一斉に静まる女生徒たち
ミンチン「アメリア……来るんです！」
アメリア「は、はい、お姉様……！」
ミンチン、アメリア、モリー、階段へ。
茫然と見送るアーメンガード、ロッテイたち──
冷笑して顔を見合せるラビニア（別服）、ジエシー、ガートルードたち──

7 同・屋根裏部屋への階段

上って来るミンチン、アメリア、モリー。

8 同・屋根裏部屋

開いた儘の戸口に現われるミンチン、ジロリ見て立つ

――続いてアメリア。

――床に倒れた儘のセーラ。

アメリア「まあ、可哀想に……」

急いで中に入ろうとする。

ミンチン「アメリア！」

アメリア「え……」

ミンチン「同情してやる必要はありません」

驚くアメリアに構わず、モリーを振返る。

ミンチン「モリー……ベッドに戻しておやり」

モリー「はい、院長先生……」

モリー、入るとセーラを抱え上げる。

ミンチン「全く、厄介ばかりかけて……」

アメリア「お姉様……」

急いで引返すミンチンと、追うアメリア。

9

同・院長室

入って来るミンチンと続くアメリア――

アメリア「お姉様……あれはただの病気ではありませんわ、早くお医者様を呼ばなくては…」

ミンチン「そんな事をしたら、大変な出費になるんですよ！……この上、あのセーラに損をさせられるなんて真っ平です！」

アメリア「でも、うちでは沢山の生徒さんたちを預ってます。もし、病気が拡がったりしたら、御両親の心配は勿論の事、この学院の評判が……」

ミンチン「（ジロリ）この学院の評判……？」

アメリア「お姉様、ホガース先生をお呼びしましょう、とても有名なお医者様ですし」

ミンチン「とんでもない！……あの先生を呼んだらいくら掛るか

知れませんよ！」

アメリア「では、ワイルド先生では……とてもお安いってお話ですわ」

云ってしまって、はっと首をすくめる。

アメリア「でも……見立て違いが多いとかであまり評判は……」

ミンチン「やむを得ません。その先生を呼びましょう」

アメリア「え……」

ミンチン「安ければ結構。さ、早く！」

アメリア「は、はい、お姉様……」

アメリア、慌てて出て行く——

見送ってミンチン、大きく吐息する。

10 同・屋根裏部屋

ドアが開き、ベッキーが湯気の立つ温かそうなスープ

皿と、冷水タオルの盆を運んで来る。
ベッキー「お嬢様……お嬢様……」
だが、ベッドのセーラは、眼を閉じたまま昏々と眠り続けている——ベッキー、そっと額にタオルをあてる。
ベッキー「じゃ、お眼がさめたら、召し上って下さいましね……力になりますから」
聞えている相手に云うように、悲し気に云い残すと、スープ皿をベッド脇の椅子の上に置き、そっと出て行く——

11 同・表

辻馬車が着き、鞄を持ったアメリアに続いて降り立ったのは、崩れた服装に、赤鼻、度の強い眼鏡の医師、小男のワイルド——

12 同・三階の廊下

ミンチンとアメリアが、ワイルドを案内して上って来る――鞄を持って続くモリー。

アメリア「この上ですわ」

ワイルド「ほう……（シャックリして見上げる）」

ミンチン「モリー、御案内して……」

モリー「はい、院長先生……」

モリー、ワイルドを案内して、奥の屋根裏への階段へ――

見送ったミンチン、顔をしかめて口前で空気を払い、息を吐く――

ミンチン「なんです！　あのお酒くささ……」

アメリア「ほ、ほんとに……」

13

同・屋根裏部屋

入って来るモリーとワイルド――
――昏睡しているベッドのセーラ。
ワイルド「フム。ここの生徒じゃなかったのかね」
モリー「は、はい……」
ワイルド、ベッドに行くと、椅子の上の既に冷たくなっているスープ皿を取り、床の上に押しのけると、椅子に坐る。
毛布の上に投げ出されたセーラの手首を取り、脈を確かめる――
ワイルド「ふうむ……こりゃいかんな……」
はっと見るモリー――
ワイルド、セーラの額に手を当てる――
ワイルド「ううむ……相当にいかん」

驚くモリー。

14 同・二階廊下

階段上を見上げて騒いでいる女生徒たち。
冷笑するラビニア、ジェシー、ガートルードたちと──
心配そうなアーメンガード、ロッテイ。
階下から、手洗いの洗面器を捧げたベッキーが上って来ると、女生徒たちの中を三階へ上って行く──

15 同・三階廊下

屋根裏への扉が開き、モリーと、続いてワイルドが出て来る──
アメリアとミンチン、急いで傍に迎える。

アメリア「あの……如何でしたでしょうか」
ワイルド「うむ……」
ワイルド、ポケットから酒の小瓶（金属）を取り出すと、ひと口呑む。
顔をしかめるミンチン、アメリアと顔を見合せる――
ワイルド、瓶をポケットに納め、掌で口を拭うと、ジロリと二人を見る。
ワイルド「左様……ワシの見立てでは、相当に厄介至極な病気のようですわい」
ミンチン「と申しますと？」
ワイルド「つまり、恐ろしい、命とりの伝染病と云えば、見当がつくじゃろう」
ミンチン「ま、まさか、コレラ……」
ワイルド、ジロリ見て、大きく頷く。
ワイルド「おぼえておいでじゃろう……かつて、このロンドンでも、

一日に四百人づつの人間が、コレラで死んで行った……
あれからまだ半世紀も経ってはおらん……そのコレラが
また舞い戻って来たのじゃ」
──一方に来ていたベッキー、洗面器を捧げた儘、愕
然と立尽す。
ワイルド、ゆっくり近づくと、その洗面器で両手を洗
う。
茫然と傍に続くミンチン、アメリア。
ワイルド「可哀想じゃが、もう手遅れのようじゃ……永くはもつま
い」
驚くベッキー、ミンチン、アメリア。
ワイルド「とにかく、他の生徒に移らんよう、あの部屋の周りには
消毒薬を撒く事が必要じゃな」
頷くミンチン、アメリア──
ワイルド「それから、またワシを呼ぶ気なら、特別料金を頂くから

そのつもりで」
洗った手で、粗野に手水を切るとハンカチで拭く——

16 同・表

モリーに送られたワイルドが、辻馬車に乗り帰って行く——

17 同・院長室

入って来るミンチンとアメリア——
アメリア「お姉様……セーラさんの容態を見て参りましょうか」
ミンチン「そんな事は、どうでもよろしい！」
アメリア、ビクッとなる——
ミンチン「全く、あのセーラの為にこんな目に逢わされるなんて…

…」

焦々と歩き廻ったが、振返る。

ミンチン「アメリア、この学院からそんな病気が出たと知れたら、経営はメチャメチャです。絶対に秘密にするんです。判りましたね！」

アメリア「は、はい、お姉様……」

18 同・屋根裏部屋

昏睡するセーラに構わず石灰を撒く、タオルでマスクしたジェームス――石灰バケツを手に心配気に立尽すベッキー。

――C・M――

19 同・表（夕景）

――点燈夫がガス燈を点けて行く。

20 同・地下の食堂（夜）

夕食を食べている女生徒たち――見廻るミンチンと、一方にアメリア。

ミンチン「……と云う訳で、セーラの病気は、お医者様のお話では、極く軽いものだそうですから、皆さんも、決してその事で心配したり、騒いだり、よその方に喋ったりしないように……判りましたね」

頷く女生徒たち――

その中に、秘かに顔を見合せるラビニア、ジェシー、ガートルードと、心配そうなアーメンガード、ロッテ

イ。

ミンチン「アーメンガードにロッテイ」

アーメンガード「は、はい……」

ロッテイ「はい……」

ミンチン「とは云っても、病気は病気です……勝手に屋根裏部屋に上って、セーラに逢おうとしたりする事は、絶対に許しませんから、そのつもりで。判りましたね」

アーメンガード「は、はい……」

ロッテイも泣顔で頷く——

ミンチン「では、皆さん……今夜は、食事がすんだら早目に休むように……」

ラビニア「はい、院長先生……」

21

同・屋根裏部屋（夜）

仄暗いローソクの灯の下に――ベッドに昏睡を続けるセーラ。
洗面桶で、濡れタオルをしぼったベッキーが、セーラの額にあてかえる。
セーラの枕許に置かれたエミリーと、父母の写真額――
ベッキー「では、お嬢様……お淋しいでしょうけど、あとでまた参りますから、エミリーちゃんと、お父様たちと、ここで待ってて下さいましね」
ベッキー、洗面桶をとると、そっと出て行く――

22 同・二階の廊下（夜）

シーザーが起上る――階段を上って来るラビニア、ジエシー、ガートルード。
ガートルード「ね、ね、セーラの病気が軽いだなんて、おかしくな

い？」

ガートルード「そうよ、そうよ。軽かったら、あの院長先生が、セーラの為にお医者まで呼ぶ筈がないわ」

ラビニア「フフ……きっと、セーラは、もう直ぐ死ぬわね」

ジエシー「ええッ？」

ガートルード「どおして？」

ラビニア、ふっと振返る——階段中途の踊り場に、驚いて立尽しているアーメンガードと、ロッティ——女生徒たち。

ラビニア「フフ……判らないの？ ……つまり、アーメンガードとロッティの親愛なる友、セーラは、もう直る見込みのない怖ろしい病気にかかっているって事よ」

アーメンガード「え、そ、そんな……」

ラビニア「でなければ、ミンチンさんが、あんなに大あわてで、セーラの屋根裏部屋を消毒させたり、私たちに口どめした

り、あんたたちに近づくなと云ったり、する訳がないでしょ……そうじゃなくて？　アーメンガード」

アーメンガード、蒼然とつまる――

突然、ロッテイが泣顔で前に出る――

ロッテイ「嘘だもん！……セーラ・ママは死ないもん、きっと直るもん！」

ラビニア「フン、じゃ、屋根裏部屋へ行ってセーラの顔でも見て来るといいわ。きっともう死にそうな筈だから」

ロッテイ、わっとアーメンガードに泣きすがる――

アーメンガード「ロ、ロッテイ……」

アーメンガードも、泣きそうな顔でロッテイを抱きよせる――

ラビニア「フフ、今のうちに沢山泣いとくといいわ。もうすぐセーラとお別れですものね」

どっと笑うジエシー、ガートルード。

ラビニア「さ、私の部屋でトランプ占いでもしましょ。セーラの運命のね」

ラビニアたち、三階の階段へ──

女生徒たちも、顔を見合せて、それぞれ自室に戻って行く──

取り残されて、じっとロッテイを抱きとめているアーメンガード──その眼に涙が溢れている。

アーメンガード「泣かないで、ロッテイ……あんたが泣いたら、私までどうしていいか判らなくなっちゃうもの」

ロッテイ「だって、セーラ・ママが……セーラ・ママが……（泣く）」

突然、アーメンガード、はっと気づく。

アーメンガード「そうだわ……私、行って来る！」

ロッテイ「え、どこへ行くの？」

アーメンガード「シイッ……ロッテイ、お部屋で待ってて！」

ロッテイ「あ、アーメンガード……！」

アーメンガード、急いで階段を降りて行く――のっそり続くシーザー。

23 同・地下の洗い場（夜）

タオルと洗面桶を洗っているベッキー。

モリーとジエームスがのぞく――

モリー「フン、まだセーラの世話を焼こうってのかい。お蔭でこっちは手が足りなくて大変だったんだよ」

ベッキー「す、すみません……」

ジエームス「ま、いいや。お前がセーラにくっついてる分にゃ、こっちは厄病神にとりつかれなくてすむってもんだからな。ははは」

ジエームスとモリー、去る――

ほっと息をつくベッキー――一方で鳴くシーザーの声

に、怪訝にその方へ行く。

24

同・地下の廊下（夜）

表へ上る戸口の傍に――シーザーにまといつかれて困っているアーメンガード。

アーメンガード「シイッ……お願いだから、鳴かないで」

シーザー、また鳴く――

出て来るベッキー、驚く――

ベッキー「まあ……アーメンガードさん……」

アーメンガード「あ、ベッキー……」

ベッキー「こ、こんな所で一体なにを……」

アーメンガード「あの、私、セーラの病気の事で、叔母さんの所へお薬を貰いに行こうと思って……」

ベッキー「まあ、お嬢様のために……」

アーメンガード「ええ、誰にも黙っていて」
ベッキー「ま、待って下さいまし……こんな夜遅く生徒さんが町へ出たら大変でございます。行くなら私が参ります」
アーメンガード「えッ？」
ベッキー「なあに、お嬢様のためなら、夜だろうとなんだろうと……さ、場所を教えて下さいまし」
アーメンガード「ベッキー……」

25 同・表（夜）

灯りの消えた窓——使用人階段をそっと上って来るベッキー、窓を振り返り、表通りへ踏み出す。

26 同・前の広場（夜）

そっと抜けようとして来たベッキー、ギクッと立停り、見る——ざわめく風の音。
前方から伸びかかる大きな人影——
声「ベッキーじゃないか！」
はっとなるベッキーの前に、駆け寄って来るピーターの姿——
ベッキー「ピーター！……どうしてここへ？」
ピーター「いや、今日は、お嬢様が買い出しにも来ないんで、気になってさ」
ベッキー「そ、それが、大変なのよ……お嬢様が、重い病気にかかって……」
ピーター「な、なんだって？」

27 同・屋根裏部屋（夜）

灯火は消え、月光の中に、昏睡しているベッドのセーラ――

28 同・前の広場（夜）

ベッキー「それで、アーメンガードさんに地図を書いて貰って、薬を頂きに……」
ピーター「そうだったのか……ようし、イライザ叔母さんの家なら、前にお嬢様と一緒にポニーの馬車で行った所だ、行こう！」
ベッキー「あ、ピーター！」
繇るピーターを急いで追う――

29 道（夜）

走るピーターと、続くベッキー――

30 ミンチン女学院・台所（夜）

暗い中で――ポッンと椅子に掛けて待っているアーメンガード。

その足許にシーザー。

31 イライザ叔母さんの家・表（夜）

荒い息で駆けて来るピーターとベッキー。

玄関に駆け寄るとノッカーを鳴らし呼ぶ。

ピーター「今晩は……！」

ベッキー「アーメンガードさんのお使いで来ました！」

ドアが開き、イライザが顔を出す――

イライザ「まあ……あんたは、あの時の御者さん……」
ピーター「ピーターです！　……実は、セーラお嬢さんの事で、是非お願いが……」
イライザ「まあ……あの気の毒なお嬢さんの事で？　……さ、お入り」

32

同・居間（夜）

入って来るイライザとピーター、ベッキー――
イライザ「なんですって？　……あのセーラさんが……？」
ベッキー「は、はい……お医者様の見立てでは、もう手遅れだとか」
ピーター「お願いです……なんとか、お嬢さんが助かる薬を……」
イライザ、考えたが、吐息する――
イライザ「判ったよ……お医者が手遅れだと云うんじゃ、その病気に利き目があるかどうか判らないけど、うちのとってお

きのせんじ薬をあげるから、ためしてごらん」
ピーター「うわあ、よかった！」
ベッキー「あ、ありがとうございます！」
イライザ「それから、帰り道は、馬車を呼んであげるから安心おし」
ピーター「す、すみません！」
ほっと顔を見合せるピーターとベッキー。

33 道（夜）

——走る辻馬車。

34 ミンチン女学院・表（夜）

その辻馬車が停り、薬壺を手に降り立つベッキーとピーター——

馬車、走り去る——

ピーター「じゃ、ベッキー、頼んだよ」

ベッキー「ええ……ありがとう、ピーター」

ベッキー、そっと使用人階段を降りて行く——

——心配そうに見送るピーター。

35 同・台所（夜）

待っているアーメンガード、はっと立つ。

入って来るベッキー——

アーメンガード「あ、ベッキー！」

ベッキー「お蔭様で、このお薬を……さ、参りましょう」

二人、急いで一方へ——続くシーザー。

36 同・三階廊下（夜）

上って来るベッキーとアーメンガード、そっとミンチンの部屋の前を通り、屋根裏への階段口へ——

続こうとしたシーザー、閉る扉にガツン。

37 同・屋根裏部屋（夜）

ドアが開き、そっと入って来るベッキーとアーメンガード——灯りをつける。

ベッドに——昏々と眠っているセーラの姿がある。

ベッキー、アーメンガードと近づくと、セーラの額からタオルを取り、手をあててみる。

アーメンガード「セーラ……イライザ叔母さんに頼んで、お薬を貰って来たわ」

眼を閉じ、病的な呼吸を続けるセーラ。

顔を見合せるアーメンガードとベッキー。

薬壺の蓋を取り、スプーンに少量移すと、ベッキー、そっとセーラの唇に流し込む。
ゴクリ……と、セーラの咽頭が動き、薬液が無意識に呑み込まれる――
ほっと顔を見合せるアーメンガードとベッキー――
ベッキー、またスプーンに薬を移し、そっとセーラに呑ませる――
気づかわし気に見守るアーメンガード。

×　　×　　×

灯りに浮ぶ二人を――壁穴から出て来たメルの一家が、怪訝そうに見上げている。

おわり